

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1870年代のフィジーとブラウン・コレクション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 和也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002256

1870年代のフィジーとブラウン・コレクション

橋 本 和 也

(京都文教大学人間学部)

1. はじめに

国立民族学博物館所蔵のジョージ・ブラウン・コレクションに含まれるフィジー諸島の民族資料は、すでにフィジー博物館を訪れた者の眼にはものたりなく映るであろう。その内訳は、腰みの(グラス・スカート) 2点、敷物1点、樹皮布17点、樹皮布用叩き棒1点、樹皮布用染め型10点、棍棒20点、カバ用容器2点、カバ用ヤシ殻製容器3点、社の模型1点、手斧3点、土器15点、ロープ1点、食事用敷物10点、木皿3点、木鉢3点、うちわ2点、払子3点、籠9点、櫛4点、枕3点、儀礼用杖1点、首飾り2点、鯨歯14点、蛸取り用擬似餌鉤1点などである。さらに、後ほど真偽のほどを問題にする「食人用フォーク」が2点ある。他の地域に比べてフィジーの資料の点数が少ないのは、ブラウンがフィジーに宣教師として赴任していないことが原因であろうと思われる。しかしフィジーは彼にとってとりわけ思い入れのある地域であった。宣教師として赴任こそできなかったが、フィジーには何度も訪れており、教会関係者も彼がフィジーに特別の思いを持つことを知っていた様子が手紙のやりとりなどからうかがうことができる。フィジーでの写真撮影や収集は、彼が訪問した時に行われたようである。

本稿では、1875年にブラウンがニューブリテンへの布教のために島嶼人教師をフィジーにリクルートに来るまでの経緯とその選抜の様子、そして1870年代のフィジーの社会的・政治的・宗教的な状況、およびブラウンのフィジーでの収集行為と収集品について検討する。

2. 島嶼人教師募集の経緯

1860年に宣教師となったジョージ・ブラウンは、オーストラリアのメソジスト教会の会議で、はじめは当初懂れていたフィジーへの赴任が認められそうになったが、会議途中で変更になりサモアに赴任することになった。彼は牧師になる以前に様々な遍

歴をし、ニュージーランドでの滞在中に、宣教師一家の世話になった。そこでフィジー宣教で高名なライス牧師に何度か会い、自分も牧師になってフィジーへ行くことに憧れた。実際、宣教師になったブラウンはサモアには14年間滞在し、1874年に引き上げた後、直ちにオーストラリアで数年来主張してきた新たな太平洋地域の島における宣教活動の開始についての働きかけを行なった。その年のうちにシドニーの本部から決定の承認を得てニューブリテンへの布教に乗り出すことになった。その決定を受けて、1875年1月にはニュージーランドに行き、そこで新しい宣教活動についての講演をしたり、妻子の落ち着き先を決めた。さらに宣教活動の中軸となる島嶼人牧師を募るためにフィジーを訪れることになった。伝道協会のジョン・ウェズレー号でシドニーから4月27日にフィジーに渡ったが、それにはロリマー・ファイソン牧師とジェッセ・キャレイ牧師の2家族、それに博物学者で収集家のフォン・ヒューゲル男爵と2人のアシスタントも乗っていた。ファイソンは学位を持つ宣教師で、オーストラリアのアボリジニやフィジーの親族研究の成果を1872年以降発表しており、以後「フィジーの土地所有」に関する論文や、「フィジー語の方言の見本」、1904年には有名な“Tales from Old Fiji”を発表している。キャレイは1859年に赴任しこの1875年にフィジー管区議長の職を最後にフィジーを離れた。ヒューゲルは当時21才の若者で、この年から収集をはじめ、他の訪問者や宣教師、居留者とは違った視点から広範囲の資料を収集した。彼の収集についてはまたあとで述べる。

G・ブラウンの自伝〔1978〕によると、つぎのような経緯が記されている。1874年にフィジーは英国に併合され、植民地となった。1875年にフィジー代表として大首長ザコムバウがシドニーを訪れた。戦艦ディド号と他の船で一行は帰国したが、その時オーストラリアで流行していた麻疹を持ち込み、フィジー全国に感染させ、4万人の死者を出した。ブラウンが訪ねた町々では人口の半数を失っていたところも多くあった。バウ島、ナヴロア、レワ、ダヴイレヴを訪ねた。1875年5月28日にバウ島に着き、6月1日に現地人牧師の養成所ナヴロアで、宣教師と現地人牧師との会合を持った。その後、研修中の学生に会った。みな疫病への対処で顔が青く、疲れた様子だった。そこで新たな宣教地となるニューブリテンの気候や恐ろしいと評判のそこに住む人々の情報、そしてもう二度と故郷に帰ってこれない危険性などについて知りうる限りの情報を与えた。また、白人宣教師がいないところにひとり取り残されることも話した。当時養成所の校長であったウォーターハウスは、一晚家族とともに考えて、明

日返事をするように促した。翌日83人全員が顔を出し、全員が参加の希望を出した。志願者が1人もいない可能性もあると覚悟していただけに、ブラウンはその時の光景を印象深く覚えていた。既婚者6人と独身者3人をその中から選出した。フィジーでの最初の島嶼人牧師であり、首長間戦争の時代に数々の修羅場をくぐり抜けた英雄的存在であるジョエリ・ブル牧師が彼らにスピーチをし、聴衆に感動を与えた〔Brown 1978 : 75-76〕。6月12日には出発の準備が整ったが、植民地政府はブラウンに同行する現地人教師（宣教師）を総督府に呼び出した。とくに、総督府のレイヤードは、彼らが自分の意志で行くことを決めたのか、どのくらいのサラリーをもらえるのか、フィジーには改宗させるべき異教徒はいないのかなどに関心を持って質問し、この企画に危惧を示した。それに対して、ブラウンは総督がフィジー人にこのような関心を示してくれることに感謝するという見解だけを述べることにしていた〔ibid. : 77〕。

現地人教師の募集に関しては、自発的な参加ではなく強制したもので、宣教先についての情報を隠蔽したまま任地に放り出すとの噂が流れていた。総督府としては、英国臣民となったフィジー人に対して責任があり、彼らの意志を尊重し、安全を守る必要があると考えた。総督府からの説明と質問に答えて、アミノオ・バレンロカンロカが志願者を代表して、任地の気候風土、人々の危険な性質などについてはすでに聞き、まったくの自由意志で、熟慮の上に決め、何者からもいかなる方法でも強制を受けず、神の仕事に自らを捧げる心境になったことを告げた。さらに「我々が英国臣民であると総督がお話下さったことに感謝します。ブラウン氏とともに行き、神の仕事に身を捧げます。死なねばならぬのなら死ぬし、生かされるのなら生きます」との決意を述べた。その後も船が出るまでのあいだに、「あそこに行く間違いなく死ぬぞ」と知り合いから言われたりしながら、出発の日を待った。1875年6月15日に出発し、6月30日にサモアについた〔ibid. : 83〕。サモアでは2人の教師と妻を乗せ、ロトゥマ経由でまずシドニーに向かった。

3. 1870年代のフィジー

フィジーにウェズレー教会派の宣教師が上陸したのは1835年である。フィジーではこの年をキリスト教到来の年としている。1854年に大首長ザコムバウが改宗を宣言し、臣下8,000人が同時に改宗した。翌年の1855年のカムバの戦いで勝利したザコムバウは、改宗以前のように敗者を殺すことをせずに、敗者全員に慈悲を示した。その戦後

処理によってキリスト教の実質的な有り難みを実感した5万人が改宗したと言われている。南太平洋で伝道活動を行ったプロテスタント宣教団の戦略は、まず島嶼人教師を養成し、他の島々に派遣し、島嶼人による島嶼人の改宗を行うことであった。フィジーでの宣教方針も同様で、フィジー人教師を育成し、村々に派遣し、村人を改宗させていった。ブラウンもその方針を受け継いで、フィジーの現地人牧師養成所に島嶼人教師となる人材を集めに来たのである。とくに南太平洋で宣教活動を行なったウェズレー（メソヂスト）教会派の偉業といえることは、1848年に島嶼人ジョエリ・ブルを牧師職に任命したことである。

ブラウンとシドニーからの船旅を共にしたキャレイ牧師が最初に赴任した1859年当時は、1万5000人の正教会員と5万4000人の礼拝参列者、9人のフィジー人牧師、267人の信徒牧師がいた。そして1875年にキャレイが退職するときには、2万4962人の正教会員、12万2526人の礼拝参列者、56人のフィジー人牧師、869人の信徒牧師、それにこの年からはじまったニューブリテンなどへの宣教にかかわる10人の「宣教師」を抱えるようになった [Wood 1978 : 142-143]。12万人の礼拝参列者という数は、フィジー人のほとんど全員がキリスト教徒となっていることを表している。

植民地政府が設立される前に、ウェズレー教会はフィジーのほとんどの地域に教会を建て、初等教育や日曜学校を組織的に展開していた。英国人居留者はフィジーの英国への併合を望んだが、英国は国内統治が成立していることを条件とし、それが整うまでは併合の申し入れを受け付けなかった。最終的には1874年にフィジーは英国の植民地となるが、それまでは白人居留者の働きかけで「国家統合」への動きが活発に見られた。白人居留者は、自ら占有している土地の所有権を法的に確保するために、正式な「政府」を必要としていた。彼らは1865年からフィジー人首長たちに働きかけて混血の「現地政府」を創設しようとした。その動きは2年ごとに挫折した。大首長同士の間で第1次政府は崩壊し、税金徴収による政府運営資金が集まらないために第2次政府、第3次政府も挫折した。とくに、英国人居留者は、英国領事から現地政府に土地税や投票税を払う者は英国政府の保護からはずれるとの見解を示され、税金を納めることができず、現地政府の崩壊を手をこまねいて見過ごすことになった。1871年からはじまった第4次ザコムバウ政府は、反抗したフィジー人を捕らえ、白人植民者に労働者として渡し、それによって1,100ポンドを獲得し、政府の設立資金とすることができた。現地政府は問題を抱える白人入植者の反乱を治め、さらに長年反抗してき

た山地民を討伐する部隊を派遣して平定したことで、ようやく英国が要求していた「国内統治」を整えた。その結果、1874年にフィジーは英国の植民地となった〔Derrick 1946 : 159-201 ; 橋本 1996 : 75-78〕。

英国からは翌1875年に初代総督ゴードンが赴任した。彼の赴任はブラウンと収集家ヒューゲルがフィジーを訪れた時期とほぼ同時期であった。ヒューゲルは8月に島内の収集から戻ってゴードン総督邸を訪ねた。彼の日誌からは、ゴードンが各部屋を博物館風に飾り付け、民族収集品の科学的な価値に関心を持っていることや、最初に総督府が置かれたレブカの町はずれでは工芸品の取り引きが行われ、さながらファッションナブルなリゾート地の骨董品屋のようであった〔Thomas 1991 : 170〕、という様子をうかがい知ることができる。

4. ヒューゲルとブラウンの収集

ブラウンがヒューゲルと会ったのは、1875年1月にニュージーランドのメソヂスト教会派の会議に出席した時であった。ブラウンは、そこで新たな宣教活動についての講演をし、またサモアから引き上げた妻子が暮らすための家を購入した。ヒューゲルについての消息は、1875年1月28日付けでシドニーの教会本部の事務局長チャップマンにニュージーランドから送ったブラウンの手紙の中に見られる。

ヒューゲルに触れる前に、その手紙の要約を紹介しよう。ニュージーランドの会議では、ニューブリテンやニューアイルランドへ新たな宣教活動を開始する彼のプロジェクトに会衆から大きな賛同を得た。本来ならこれからすぐにもシドニーに出発すべきだが、残念ながらブラウン夫人が病気になる、様子を見るために出発を少し延期しなければならなくなった。夫人と家族がニュージーランドに留まるために家を購入したが、まだ家具などのアレンジが終了していない。また伝道先のニューブリテンについての情報を集めており、「ブランシュ号」のシンプソン船長や、英国国教会系のメラネシア・ミッションのティリー船長を訪ねて海図を手に入れるつもりであった。ニューブリテンの島民が本当に悪い性格であるとの話を聞いた。その中ではポート・ハンターの人々が友好的で、そこを拠点・補給地とするのがよいだろうとの情報を得た。また小型艇の購入は絶対に必要であり、それなしでは宣教活動を開始できないほど重要なものである。船長から「ウェズレー号」が小型艇を運ぶのは難しくないと言った。シドニーで手に入れるつもりであるといった内容であった〔M.O.M.102〕。そ

の手紙の最後の部分に、「私は若いドイツの男爵から申し出を受けている。彼は我々と航海を共にしたいと言ってきた。彼は博物学者で大英博物館と関係していると思われる。彼の名はフォン・ヒューゲル男爵で、自分で旅費を出すとっております」といった消息が記載されている。

西洋人がいわゆる「未開の地」に来て、その品物を収集するとはどういう行為なのだろうか。ニコラス・トーマスは、南太平洋の島々と西洋列国との国際的な不平等と、それぞれの地域における「流用」との弁証法を捉えようとした [Thomas 1991]。それは世界システム、亜地域の社会システムの本質的な決定要素であると主張する者と、その集団と文化は相対的に自律的なものだと言主張する者の間の論争を越える展望を得る試みであった [Thomas 1991: 207]。その著作の中に、西洋からフィジーの工芸品を収集に来たアナトール・フォン・ヒューゲルについての記述がある。ヒューゲルは1875年当時に21才で、オーストリア人とスコットランド人の両親を持ち、保養目的で南海に来た。父親も自然物や民族品の収集家であった。彼はそれまでフィジーで民族学的な収集がなされていなかったことに驚いた。彼は工芸品の収集からはじめ、本島の遠隔地にも出かけた。彼の収集方法は他の訪問者、宣教師、白人居留者とは違って、科学的であるべきことを自覚していた。現地語名、原材料、地元の交換に使われる工芸品の意味についてのノートを作っていた。広範囲の資料収集を心がけ、フィジーのトータルな物質文化を表象しようとした。彼はケンブリッジ大学附属考古学民族学博物館の創設当時の学芸員となった。フィジーでの収集の様子は彼の日誌からうかがうことができる [ibid.: 167-168]。

トーマスによれば、ヒューゲルの収集方法は交換によっていたようである。釣り針一個とヤングナ容器 (*tanoa*) を交換し、友人の頭にあった髪飾りを一尋の布地と交換した。彼は、女性が作る土器や籠よりも、彫刻が施された棍棒や槍、鯨歯の首飾りなどに収集の重点が置かれたようである。しかし一方では植物繊維で作ったグラス・スカート (*liku*) に興味を持ち、各地から収集し、それぞれを比較していた [ibid.: 168-169]。ウェズレー派は彼の教派ではないが、フィジー人の大多数を信者としているその教派の宣教師と遠方の地に出かけ、宣教を手伝い、変容を受けていないフィジー人を探し出した。彼は収集によって物質文化の変容の歴史的な過程を示そうとした。彼のその収集方針は、宣教師がキリスト教への改宗を強調するために異教時代の「偶像」を集めたり、また植民者が先住民の「野蛮性」や「殺戮」を強調するために

「棍棒」や「食人用フォーク」を集めるのとは大きく違っていた [ibid : 169] 。

宣教師は、偶像を間違った宗教の「客体化」として、現地人の宗教的崇拜の文脈から切り取って収集し、ときには破壊し、ときには陳列した。偶像を譲り渡す行為そのものが、それらの品物と結びつく精霊を捨て、従来への信仰を拒否することを意味することになる。それは異教のアイデアの不合理性を示し、また小さく、荒削りで、グロテスクな形を持つ異教の神がキリスト教の精霊や超絶者と同じ地位にいることの馬鹿らしさを示すことになる [ibid. : 153] 。説教壇の上から提示される異教の肖像は、現地人が異教の神を拒否したことを表象するものとしてキリスト教の文脈のなかに「再文脈化」されたことを示す。それは宣教師にとっての成功のトロフィーとなり、帰国後彼らを派遣した母国のキリスト教信者たちの感情を高揚させるものとなった。現地人の野蛮性は、彼らによって描かれた絵を提示し、彼らを使用した棍棒や槍を描写することで示された。後に説明するが、とくに「食人用のフォーク」はフィジー人の野蛮性の証となった。また、戦士の長から宣教師が武器や他の品物を贈られたことは、贈り主の態度の変化や両者のあいだに信頼関係が生まれたことを示していた [ibid. : 155-157] 。

宣教師によって収集されたものが、必ずしも残虐性だけを強調したものではないことは1858年に出版された著作“*Fiji and the Fijians Vol 1*” [1982] を見れば分かる。これは1840年から1853年までフィジーで布教活動をしたトーマス・ウィリアムズがまとめたフィジーの百科辞典的な本である。当時の戦争の様子、工芸品、習慣などが記述されており、とくに工芸品に関して正確なスケッチが多く描かれており、当時の様子を知る手がかりとなる。フィジー博物館はその本を1982年に再出版しており、現在容易に手に入れることができる。司祭が使用した平たい器には、人体を模したもの、鳥の姿を模したものや楕円形の容器などが紹介されている [Williams 1982 : 60] 。ブラウンの収集にもあるグラス・スカート (*Iku*) [ibid. : 66] 、うちわ [ibid. : 68] 、土器 [ibid. : 70] 、棍棒 [ibid. : 76] など描かれており、ブラウンやヒューゲルもほぼ同じようなものを収集していることが分かる。他にカヌーの製造法の詳しい説明や、家の作り方、双胴のカヌーに使われる帆と、その帆柱の頭部の彫刻などについての記述がある [ibid. : 61-101] 。このウィリアムズの研究には同僚の宣教師で、医師でもあるライスから学問的なアドバイスがあったと言われており、フィジーにおける宣教師の場合には、必ずしも「野蛮性」をことさら強調した

品物の収集を、専らにしていたようには思えない。

宣教師ブラウンのフィジーにおける収集方法も、先のヒューゲルの収集方法と同様にフィジーの物質文化全般にわたっている。彼の収集はとりわけ「異教性」を強調したり、「野蛮性」を強調するものではなかった。「食人用フォーク」は2点、棍棒も20点と他の品に比べてとくに多いというわけではない。フィジー人は「偶像」を彫刻することはほとんどなかったようである。現在のフィジー博物館でも、仮面や神像の類は一例をのぞいては見られない。ブラウンは、長い植物繊維のひだがついたグラス・スカートを一点収集しているが、それはウィリアムズの本に見られるスカートよりひだが多い。ブラウンの収集には、貴重な交換品でもある樹皮布が17点、着色されていない白地のものが1点ある。これについては後で項目を設けて説明する。他に木から剥がした樹皮を打って均等に伸ばす叩き棒が1点と染型が10点ある。今日使われている染型はバナナの葉やプラスチックを模様に取り抜き、その上に染料を塗って着色している。しかし収集品には、マットを作るパンダナスの葉が使われ、凸状態になった模様が作られている。その凸状の模様に色を付け、それを押しつけて樹皮布に着色していたようである。また収集された型には色が付けられた様子がないので、未使用のものを手に入れたと考えられる。収集品の中に巻かれたロープが1点あった。それは鯨歯（タムブア *tabua*）の紐や、模型の家（*bure*）の素材としても使われている。この紐は、古いヤシの実の繊維を編んだもので、フィジー語では「マンガマンギ（*magimagi*）」といわれる。さらに、手斧、水差し用の土器、蛸釣り用の擬似餌、食事用の敷物、皿、籠など、日常生活に使われるものが集められ、トータルな物質文化の収集を目指した様子がかがえる。

貴重品としては後に述べる鯨歯をはじめ、樹皮布、枕、マット、胸飾り、首飾りなどがあるが、トーマスが指摘するように、専門的な制作者によって作られ、高位の首長に贈られたものであろう。ブラウンの収集品には、枕としては竹製のものしかなかったが、フィジー博物館には堅い木で作られた立派な枕が陳列されている。それも専門家が製作し交換の場で贈られ、高位の首長が使った場合には、彼の死と共に壊されて墓の中に入れられる [Thomas *ibid.* : 73] のであろうと思われる。

5. 戦闘用棍棒と食人用フォークの「流用」

「流用」の概念は単純ではない。西洋との接触時代には、現地社会の人々が西洋の

品物を西洋の文脈から切り取って自文化の文脈に「再文脈化」する作業が一方ではある。そして他方では、西洋人が現地の品物をその本来の文脈から切り取って自文化流に「再文脈化」する作業がある。ここで例に挙げるのは、首長間戦争時代にキリスト教を自文化流に「流用」したヴェワラ村の例と、高位の首長が使うフォークを西洋流の解釈で「食人用フォーク」と説明した例である。

首長間戦争時代の戦闘の様子を英国軍艦「ヘラルド号」の画家G・ウィルソンのスケッチから知ることができる。1856年に「ヘラルド号」の乗組員は内陸部でのフィジー人同士の戦いをつぶさに見聞し、同行したウィルソンがその光景をスケッチした。ヴァヌア・レヴ島西部のヴェワラ村にブアの首長が攻撃を加えた。戦士たちは頭に白いターバンを巻き、腰に白い樹皮布 (*malo*) をつけていた。その腰布には投擲用の棍棒 (*ula*) が差し込まれている [Clunie 1977 : plate 1, Plate 2]。その戦闘図では、村は円形の柵を設けて敵の攻撃を防ぎ、攻め手がその周囲を囲んでいた。攻め手はブアとナンディの同盟軍である。彼らはウェズレー教徒で、長年ヴェワラ村の異教徒の襲撃に悩まされており、同盟を結んで異教徒の村に直接攻撃を加えることになった。4時間の攻防で、ヴェワラ村の戦士を押し戻すことができたが、攻撃側は2名の負傷者を出した。攻め手のウェズレー信者側が翌日の攻撃を準備しているあいだに、ヴェワラ村は予想外の手を打ってきた。村人は一晩のうちにウェズレーと対立する勢力であるカトリックに改宗し、和平交渉の使者を立てた。戦闘は終了することなく、以後はウェズレー教会とカトリック間の宗教戦争の様相を帯びることになった [ibid. : III]。単純に現地人同士は昔ながらの戦争を行っていたと考えるのは大きな間違いで、「異教徒」たる村人はカトリックへの改宗を戦術の一つとして採用した。キリスト教徒の異教徒征伐軍に同行したと思った英国戦艦の兵士は、一夜のうちにカトリックの村を攻めるウェズレー教会信徒に同行したことになるという事態の転換に直面し、戸惑いを感じたことだろう。これはキリスト教における全世界的な対立を、異教徒であったヴェワラ村の人々が、「改宗」という行為を地元の文脈で戦略として「流用」した例であるといえよう。

すでにこの戦争の時には、武器として火打石式のマスケット銃が登場している。しかし発砲した様子が見られないとのコメントもある。火打石が使われているためそれを受ける部分の強度に問題があったようである。主に飛び道具として使用されていたのは、さかさのとげをつけられた槍、先が枝分かかれた槍や漁用の鉞、それにウラと

いわれる投擲用の棍棒であった [ibid. : Ⅲ]。当時は村を離れたときにはいつ襲われるか分からず、先頭部が尖った「トトキア」、J型をした「キアカボ」、または根のこぶを使った「ワカ」といわれる棍棒などや、マスケット銃をかたときも手離せなかったようである。

ブラウンの収集品の中には「食人用のフォーク」が2本ある。フィジーの食人の習慣についてはよく知られており、英国のロンドン伝道協会ではフィジーをキリストの教えを伝えねばならぬ未開の地の代表だと考えていた。食人の対象となっていたのは主に長年対立している敵方の死体であった。しかし戦争がなく敵方の死体もない状況で、宗教的儀礼や高位の首長を迎える歓迎儀礼などが執行される場合には、近隣の村の低い身分の者を待ち伏せて殺害し、高位の首長＝神への供え物にした。いままで首長や司祭が生け贄の人肉を食べるときだけに使われるのが、「食人用のフォーク (*i cula ni bakola*)」である、と専門家はこれまで説明してきた。しかしその説明には西洋人による思いこみが介入していたようである。それは西洋の文脈に沿った解釈であり、西洋人による「流用」であった。その「フォーク」は、首長など聖なる人物が使用したもので、首長に所属する他の品物と同様に平民にはタブーになるのである [Clunie 1977 : 39]。トーマスは、人肉が聖なるものなので直接手で触ることがタブーとされ、食人用のフォークが使われるという記載がいくつかの論文でなされていることを紹介したあと、ホカートやクルーニーの説明を引き合いに出し、死体はタブーではなく、平民が人肉を直接手で食べていることを指摘する。一方、高位の首長にはあらゆる食物を直に手で触れることがタブーとなっており、食事のときは従者に食べさせてもらうか、またはフォークを使うので、そこから混同が生じたのだらうと解説する [Thomas 1991 : 165]。トーマスはこの「食人用フォーク」に、ヨーロッパ人による「流用」の事例を見る。

6. 樹皮布について

模様の施されていない白地の樹皮布 (*masi*) は、神の社 (*bure*) の天井から吊されて神の依り代として使われたり、男性の腰にまかれる。トーマスは樹皮布は貴重な交換品であり、「道」と「同盟」を印すものであり、社会的な再生産を示し [Thomas 1991 : 72]、近親相姦の禁止と同じ内容を表象すると説明する。樹皮布を作成するのは結婚した女性であり、未婚の女性がそれを作成することはない。それ故、女性は自

らが生まれた出自集団のために「土地の貴重品」といわれる財を生産することはない。つねに夫の親族集団にとっての財として妻たちは樹皮布を製作するのである。樹皮布用に植えられる木は「マシ」といわれ、大事に育てられる。成長するまで数年待ち、伐採して水につけ、樹皮を柔らかくして剥がす。それを叩いて、30センチメートルほどの幅になるまで均等に伸ばす。その上に次の樹皮を重ね、同様に叩いて貼り合わせる。白地のまま使われるものは、ブラウンの収集品にあるように、細長く数メートルほどのものがある。さらに長いものは神の社の天井から十数メートルも吊り下げられて神の依り代となる。短いものは戦士の腰などに巻かれ、「マロ」と呼ばれる。

首長の即位式に用いられる樹皮布についての記述は、ホカートの『王権』第7章の戴冠式に見られる。フィジーでは高位の首長は、外来の「征服王」と考えられ、また実際にもそのように語られている。その首長の即位式で、胡椒科の飲み物であるヤングナを飲むことは、土地の神を外来の首長の身体に入れることだと言われている。樹皮布はその神をとらえて閉じこめるために使われたり、神託を伝えるために神がやってくる時の依り代になることもよく知られている。マトック島では、ある神が土地の男に、祖先神である蛇をつかみながら「この宗主権を示す布を見よ。汝がこの蛇をつかみ、首長を即位させるときに、彼の腕にこの布を結びつけるように」と命じたとの伝説がある。この神の命令に従って、「外来」の首長が即位するとき、彼ら土地の代表は、首長の腕に樹皮布を結びつけ、4晩そのままにしておく。ホカートによれば、神は樹皮布に包まれて首長の所に運ばれる。神は、ヤングナの形を取って首長の体内に入れられる。首長の古い自我が死に、神がそれに代わる〔ホカート 1986: 89-97〕と言われる。

現在でも大首長たちは、正規の儀礼の時には腕に茶色に着色された樹皮布を巻き、長い樹皮布を身体に巻き付けて盛装する。ホカートの説によれば王の即位式を真似ることになる結婚式でも、新婚のカップルは樹皮布を身につけて盛装する。式後にはそれぞれが相手側の親族を訪ね、身につけた樹皮布を脱いで贈り物とする。また同様に、高位の大首長を迎える歓迎儀礼のときには、ホスト側の首長の娘が樹皮布を身につけてゲストの前に進み、ブタや亀、ヤムイモやタロイモ、土地の特産品などと同じく、身につけた樹皮布を脱いで贈り物にする。このように樹皮布には地域と地域を結ぶ「道」や、両地域間の「同盟」関係が表象される。また葬式のときには樹皮布は死者の上に被せられ、埋葬時に死者と共に墓に埋められる。この場合は即位式のときの土地の神

の魂を留める役割と通じ、樹皮布が死者の魂を守るものと考えられよう。

7. タムブアについて

タムブアは、フィジー語で「最高級の貴重品 (*kamunaga*) 」と呼ばれるものである。1920年当時、1本が5ポンドから10ポンドで町の質屋で購入でき、それを何本か持って村に行き、ヤムイモを譲りうけたいと申し込めば、4,500本も手に入れることができる、ディーンは“*Fijian Society*” [1921] のなかで述べている。また詳しくは拙著『キリスト教と植民地経験』 [橋本1996: 215-220] で、「タムブアの多義性」を分析しているので参照されたい。ディーンはタムブアが使用される14の事例を挙げているが、私はそれを(1)敬意や弔問の意などの公の感情を示すもの、(2)要請を示すもの、(3)謝罪や感謝の意を示すものという3つに再分類した。また、タムブアが使用されるのは、既存の社会関係の強化、利用、修復を意図する場面であることから、私はタムブア贈呈には集合的レヴェルにおける公的な感情が示されると考える [橋本 1996: 216-217] 。

交換される貴重品でも、トロブリアンド諸島を含む地域で交換される貴重品とは異なり、タムブアに交換の歴史が刻み込まれることはない。タムブアはつねに移動し、永く1ヶ所で所有されることはない。たしかに新しいものよりは古くて光沢のあるものが尊重されるし、小さいものよりも大きいものの方がランクは上である。しかし個々のタムブアに名前が付けられることはなく、古くなってランクが上がることもない。タムブアを渡すのは「要求」を申し入れるときであるが、受け手側に「負債」を負わせるものではない。タムブアはただ要求されたことを果たす義務感を想起させるものである。要求を断るときには、渡されたものよりも大きなタムブアをその場で相手方に返すといわれている。首長間戦争の時代は、敵方にいる密通者に、彼らの首長を殺害するように要求するときには、石蒸しオーブンで焼いたブタの口の中にタムブアを入れて贈ったといわれている。また、結婚の申し込みをするときには、男性側の長老が少なくとも1本のタムブアを携えて女性側を訪れ、タムブアの贈呈と共に結婚の正式な申し込みをする。首長の娘の場合には十数本、またはそれ以上のタムブアが必要だとされている。その意味で、タムブアはやって来る妻を表象し、さらにはその妻の出自集団との同盟の事実を表象するものとなる。

現在でも質屋で30ドルとか80ドルとかという値段が、大きさや古さに応じてつく。

またフィジー系住民が店主の土産物屋では、商品として表には出ていないが、必ずいくつかのタムプアが新聞紙に包まれて用意されている。ブラウンが収集した大きなタムプアは現在ではフィジードルで150ドルから200ドル以上は優にするであろう。しかしそれは売買の文脈での値段である。制度的な交換の文脈からは、それをはるかに上回る価値をタムプアは表明する。正規の手順を踏んで然るべき人物が要求をすれば、タムプア1つで4,500本以上のタロイモやヤムイモが提供される。その場合はタムプアの市場における取り引き的価値ではなく、制度内で喚起される価値が問題となっているのである。結婚申し込みの際に手渡されるものは、女性の価値に見合うものが必要とされる。タムプアは社会的・政治的な絆や同盟を表す。その意味で首長制度そのものが、このような制度的な交換関係の基盤のうえに成り立っていたのであり、現代までもその関係は受け継がれている。

タムプアが表象するものは、貴重品の交換や妻となる女性の交換、そしてその女性を作る樹皮布やマットのような「土地の財」の交換などにもとづく政治形態である。タムプアについてのスピーチの中では、必ず親類同士としての絆が確認され、それぞれの首長の健康が祈られ、そして首長と臣下の人々の祖先神たちが賞賛される。時には「これは血の、生命のカムナングである」といった形容をされることもある〔橋本 1984 : 51〕。まさにタムプアの贈呈と受容は、両者の「血」と「生命」を交換することを意味しているのである。

8. おわりに

収集とはいかなる作業であり、何を意図して行われるのであろうか。記念品や土産物とはどこが違うのだろうか。未開の民がキリスト教に改宗したためにもはや使わなくなった異教の信仰の道具や武器を集めた宣教師や、異郷趣味を満たす品物を集めた貿易商人などによる収集と、「科学的」な収集とはどこが異なるのであろうか。ヒューゲルはトータルな物質文化の再現を心がけて、収集品について記録し、同じ品物でも地域による違いなどを系統的に把握する試みをしていた。ブラウンの場合は、メラネシアの物質文化とポリネシアの物質文化の洗練度を目安にして、どちらの文明が上位かを同定しようとの意図があった〔Eves 1998 : 55〕。彼らの収集の背景には当時の時代精神とでもいうべき進化思想を実証しようという意図が反映されていたといえよう。

本稿では、1870年代のフィジーの状況と、1875年にブラウンが新たな宣教活動の実質的な担い手である島嶼人教師をフィジーの牧師養成所で募った経緯をまず明らかにした。収集に関していえば、島嶼人教師（実は実質的な「島嶼人宣教師」）と、西洋人宣教師との間には大きな違いがあった。「島嶼人宣教師」は「改宗の物語」を母国に伝えることには強い関心があったが、品物の収集にはそれほど関心がなかった。ニューブリテンやニューギニアの島嶼部での宣教の様子は、1883年から出版されたフィジー語の教会月刊誌“*Ai Tukutuku Vakalotu*”に詳しい。島嶼人宣教師にとっては、赴任先の異教徒の性格や習慣についての関心が強く、聖書の力を示していかにか改宗させたかという記述は多いが、物質文化に関しては、自文化とそれほどの差異がないためか、収集したという記載がない。ブラウンとヒューゲルの収集については、当時の事情が記録などで分かる範囲で考察した。ヒューゲルの収集方法は基本的には、当時の貿易商が必要な品々を手に入れた方法と同じく、物々交換で行われたようである。ブラウンの収集には、枕、櫛、壺、籠、蛸取りの擬似餌、ロープ、うちわ、木鉢、グラス・スカート、樹皮布づくりの道具など当時の生活用品があった。その一方で、野蛮性の象徴と考えられる戦闘用の棍棒や「食人用のフォーク」なども集められていた。とくにこのフォークに関しては、首長階級に関わるタブーについての正確な知識の欠如と、食人のためだけに特別に用意された首長用の立派なフォークという西洋人が望む話題性が、このような「流用」を生むことになったと指摘できよう。

鯨歯、胸飾り、樹皮布などは、キリスト教への改宗や植民地体制下での変容をうけながらも、現在まで続く首長制度を支える貴重品である。この首長制度を基盤から支えているのは、様々な重要な機会に行われる儀礼的贈与交換であり、そこで交換される貴重品には、相互の同盟関係や親族としての絆が託されている。首長間戦争の時代にはこの同盟関係が大首長の生命を守り、または奪うものであった。多くの問題を抱えながらも「民主的」に運営される今日のフィジー政府でも、この絆は政治的な力を確保する源にもなっている。ブラウンの収集品の中には、もう一つ重要な品物であるヤングナ（カヴァ）が含まれていない。これは生の植物で、収集には向かないものであるが、すでに説明したように首長の即位式には欠かせないものである。ヤングナは土地の神を表象し、即位式で首長の身体に入り、「外来の首長」を「土地の神」に変換させる。ヤングナなしではフィジーの首長制度は語れない。

本稿では「食人用フォーク」「樹皮布」「鯨歯（タムプア）」を取り上げ、それにつ

いては解説した。それらは結局は筆者が首長制度を説明するための道具立であったということができよう。それと同様に、ブラウンは自らの仮説を検証し、証明するためにポリネシアとメラネシアの品々を収集したともいえよう。また、宣教師は改宗の成果を見せるために「野蛮性」を表象する品物を収集し、宣教博物館に収納する。そして、人類学者は、当該文化を説明するための道具としていくつかの品物を選択的に取り上げて解説を加える。ブラウンの収集を批判しうる者はいかなる立場に立つのであろうか。宣教師であり収集家であったブラウンは、収集品を自分なりの意図のもとに「流用」した。彼の収集品は、現在いかなる意味を持つのであろうか。現在の解釈者もさらなる「流用」を継続するだけであらうか。「流用」や「再文脈化」の議論を越える展望を得ることは可能であらうか。

文 献

Brown, George

1978 *George Brown, D.D. Pioneer-Missionary and Explorer An Autobiography.*
New York: AMS Press.

Clunie, Fergus

1977 *Fijian Weapons & Warfare.* Bulletin of the Fiji Museum, No.2. Suva :
Fiji Museum.

Dean, W.

1921 *Fijian Society: Sociology and Psychology of the Fijians.* London :
Macmillan and Co.Limited.

Derrick, R.A.

1946 *A History of Fiji.* Suva: Colony of Fiji at the Government Press.

Eves, Richard

1998 Commentary: Missionary or Collector? The Case of George Brown.
Museum Anthropology 22 (1), 49-60

橋本和也

1984 「フィジーの *Veiqaravi* - Feasting の意味論的分析に向けて-」 『民族学研究』
49 (1) 別冊, 27-62

1996 『キリスト教と植民地経験－フィジーにおける多元的世界観』 人文書院。

ホカート, A.M.

1986 『王権』 橋本和也訳 人文書院。

Wood, Harold, A.

1978 *Overseas Missions of the Australian Methodist Church, Vol. II.*

Fiji: the Aldersgate Press.

M.O.M.102

“Correspondence of Rev. George Brown from 1862 to 1878”, Methodist
Church Overseas Mission. Michell Library.

Thomas, Nicholas

1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism
in the Pacific.* Cambridge: Harvard University Press.

Willisms, Thomas

1982 (1858) *Fiji and the Fijians Vol.1: the Islands and their Inhabitants.*

Suva: Fiji Museum.